

# 海士五感塾

～島の生き残りをかけた挑戦  
そのありのままを五感で感じる～

## 報告書



海士町



2008年11月27日(木)～29日(土)

## ◆海士町マップと学びの場



海のサムライと書いて『AMA』と読みます。

日本海に浮かぶ隠岐諸島のひとつ、

中ノ島が島根県隠岐郡「海士町」です。

## ◆海士町とは？

島根県の北 60 キロ、日本海に浮かぶ隠岐諸島の中の一つの島(町)。  
後鳥羽上皇が流された流刑地としても有名で、神楽や俳句などの歴史文化や  
伝統が残っており、また島すべてが国立公園に指定されるほどの自然豊かな島。  
現在人口は約 2400 人。年間に生まれる子どもも約 10 人。  
人口の 4 割が 65 歳以上という超少子高齢化の過疎の町。

人口の流出と財政破綻の危機の中、独自の行政改革と産業創出、  
人づくりによって今や日本で最も注目される島となる。

町長は給与 50%カット、課長級は 30%カット(公務員の給与水準としては  
全国最低となる)。その資金を元手に最新の冷凍技術を導入。海産物の  
ブランド化により全国の食卓を始め、海外へも展開する「(株)ふるさと海士」。  
農業特区を取って、新たに肉牛の業界に参入し、松坂牛に匹敵する  
レベルと評価されて幻の肉として知られるようになった「隠岐牛」。

2003～2008 年の 5 年間には 202 人の Iターン者が移住するなど、  
新しい挑戦をしたいと思う若者たちの集う島となっており、まちおこしの  
モデルとして全国の自治体や国、研究機関などから注目を集めています。

## ◆海士五感塾の目的

五感塾は仕事力の向上の元になる「人間力」を磨く学習方法です。  
知識の詰め込みではなく、「気づく力」「感じる力」を高めるために  
研修室から出て、地域の現場に身を置き、  
その地域に伝わる伝統文化やその地域のために働く志の高い人にふれていきます。  
五感を高め、気づく力や感じる力に磨きをかけることによって、  
学び上手になっていきます。そうすることで仕事力の向上にもつながります。

海士五感塾は

以下 3 点の学びの機会を提供いたします。その中で何を学び、  
その学びを何に活かしていくかは、皆さん次第と考えております。

- 一. 一隅を照らす人々との志の交流
- 二. 海士の自然・文化・生業を五感で体験
- 三. 多様な「つながり」の実感

## ◆スケジュール

2008年11月27日(木)		未来を創るまちづくり
時間	内容・場所	研修項目
9:00	七類港 集合	ご参考:ANA 羽田発 7:10 米子着 8:30
9:30	フェリー出航	
12:40	菱浦港 着	
12:45	隠岐牛店にて昼食	農業特区をとった挑戦の末に生まれたブランド「隠岐牛」を味わう
14:00	移動	
14:10	開発センター 着	
14:30	オリエンテーション	研修の趣旨や心構えの共有。自己紹介と町の概要や取り組みの紹介
15:30	移動	
15:45	CAS 冷凍工場	海士町の生き残りをかけた産業の新拠点を見学する
16:15	移動	
16:30	隠岐牛肥育現場	建設会社が築き上げた「隠岐牛」の現場を見学する
17:00	移動	
17:15	隠岐自然村 着	
17:30	「今日感じたこと」シェアリング	今日一日を振り返り、グループごとに感じたこと思ったことなどを共有する
18:30	交流会	行政・CASや隠岐牛の方々と海士町の取り組みや志を語りあう
21:30	入浴、就寝	

2008年11月28日(金)		今、ここに生きる命の環(自然・生業・文化)
時間	内容・場所	研修項目
4:45	起床	
5:00	朝礼	朝礼を兼ねて、前日の振り返りを全体で軽くする
5:15	移動	
6:00	大敷網(定置網)乗船	建設会社の運営する定置網漁船に乗り、漁業現場を体験する
9:00	漁労長との交流	県下一の漁獲高を誇ったこともある定置網漁船を築き上げた熱い想いを伺う
10:30	地元の方々と昼食	崎地区の方々と話をしながら、採れたての魚をいただく
13:00	移動	
13:30	農業体験	農家の方と一緒に作業しながら話を伺う(玉ねぎ植えと冬野菜の収穫)
15:30	移動	
16:00	料理講習	自分たちで採ってきた食材で、地元の方に教わりながら郷土料理作りをする
18:00	交流会	今日お世話になった漁師さん・農家さんたちと語りあう *島の伝統文化 歌と踊り の披露・体験もあり
21:00	「今日感じたこと」シェアリング	今日一日を振り返り、感じたこと思ったことなどを共有する
22:00	入浴、就寝	

2008年11月29日(土)		歴史から学ぶ 多様なつながり
時間	内容・場所	研修項目
6:30	起床	
7:00	自然散策	朝の自然を五感で感じる
8:00	朝食	
8:45	掃除	雑巾持参でお世話になった建物を掃除する
9:15	移動	
9:30	隠岐神社	名物案内人に歴史話を伺う
10:30	後鳥羽院資料館	歴史に詳しく、島の変遷を見てきた97歳の翁にお話を伺う *隠岐神社と半数ずつ交代でお話を伺います
11:30	移動	
12:00	昼食	午前中に案内してくださった方々と元祖サザエカレーを食べながら交流
13:00	共有会	全体を振り返り、1人3分程度、感じたことや想いや志を分かち合う
14:15	移動	
15:15	フェリー出航	船出を味わう
17:55	七類港 着	
	解散	ご参考:ANA 米子発 19:55 羽田着 21:15

## ◆島の師匠たちの紹介

【CAS 冷凍工場 扇谷 政弘 (おうぎたに まさひろ)さん】

一昨年度まで、CAS 冷凍工場に出向して勤めていらっしゃいました。現在海士町産業創出課にて漁業振興のために一生懸命働かれています。



【潮風ファーム 奥田 俊生 (おくだ としなり)さん】

(有)隠岐潮風ファーム取締役。「隠岐牛」のブランド化と、それを通じての隠岐全体の産業活性化に日々力を注がれています。



【大敷網 田仲 菊照 (たなか きくてる)さん】

飯古建設(有)定置網事業部漁労長。大敷網と呼ばれる定置網漁船の運営を仕切られ、自ら定置網の設計や漁船のメンテナンスを行われています。仕事中は厳しく、仕事後は優しく、これぞ仕事人という熱い方です。



【農業体験 向山 剛之（むこうやま たかゆき）さん】

農事組合法人サンライズうづか、海士町有機米研究会代表。新しいことへのチャレンジが好きで、10年近く前からアイガモ農法などの無農薬農法に取り組み、安全で美味しいお米を作られています。



【料理講習 濱中 美知子（はまなか みちこ）さん】

郷土料理はもちろん、野山や海岸を自分の足で歩きまわり自ら採ってきた食材をアレンジして新メニューを創作することが大得意な方です。また、民謡や踊りにも精通され、宴会の場をいつも盛り上げてくださいます。



【自然散策 深谷 治（ふかや はじめ）さん】

エコツーリズムの拠点「隠岐自然村」代表。自然体験・森林インストラクター。生き物について大変詳しく、中でも鳥に関しては知識の留まるどころがありません。



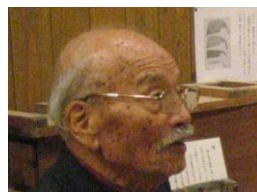
【隠岐神社案内 村尾 周（むらお しゅう）さん】

隠岐神社の宮司を務められ、また海士町民俗資料館の館長でもあり、海士町の歴史にとっても詳しいお方です。また自然がお好きでご自分で植林されたりもされています。



【後鳥羽院資料館案内 波多 総一（はた そういち）さん】

97歳というご高齢ながらも、いまだ本の制作や畑仕事に元気に取り組まれています。現・平成天皇をご案内されたことのあるほどの知識人で今の海士町はこの方なしには成り立たなかった偉大なお方です。



## ◆参加者一覧

	所属	役職
北村 三郎	人と情報の研究所	代表
40代 男性	イオン労働組合・本部	中央執行委員長代行
30代 男性	イオン労働組合・本部	社会参画・事業広報担当リーダー
30代 男性	イオン労働組合・本部	働き方の改革担当
30代 男性	イオン労働組合・本部	政策担当
30代 女性	イオン労働組合・本部	政策担当
30代 男性	イオン労働組合・本部	社会参画・事業広報担当
30代 男性	イオン労働組合・マックスバリュブロック	ブロック専門部長
20代 女性	イオン労働組合・関東	ブロック専門部長
30代 男性	イオン労働組合・中部	ブロック専門部長
20代 女性	イオン労働組合・中部	ブロック専門部長
40代 男性	イオン労働組合・西日本	ブロック執行委員長
30代 男性	イオン労働組合・西日本	ブロック専門部長
30代 男性	イオンリテール労働組合・西日本・山陰(鳥取店キッズ)	ブロックエリア議長
30代 男性	帝人テクロス	「私がやる！」プロジェクト 草の根リーダー
30代 男性	帝人ファーマ	「私がやる！」プロジェクト 草の根リーダー
30代 男性	帝人クリエイティブスタッフ	「私がやる！」プロジェクト 全社リーダー
40代 男性	新日鐵化学(株)九州製造所 動力工場	統括主任
30代 男性	青森銀行	
岩本 悠	海士町教育委員会 人間力推進プロジェクト	人づくりプロデューサー
阿部 裕志	海士町 (株)巡の環(めぐりのわ)	代表取締役
高野 清華	海士町 (株)巡の環(めぐりのわ)	取締役

## ◆プログラムの様子

### 【一日目：～未来を創るまちづくり～】

#### ◆日本海を渡る

朝 9 時、七類港(島根県)に集合。はるばる 3 時間日本海に心地よく揺られながら、隠岐國・海士町へ向かい、杉の香り漂う木造の港、承久街道キンニャモニャセンターに上陸しました。



#### ◆隠岐牛を食す

腹が減っては学びもできぬ。ということで、到着後、さっそく東京でも非常に評価の高い「島生まれ、島育ち、隠岐牛」を食べに、隠岐牛店へ。「いただきます」の前に、隠岐牛を育てている(有)隠岐潮風ファーム取締役の奥田さんから、なぜ建設業社が構造改革特区を取ってまで黒毛和牛の肥育に挑戦し、「隠岐牛」のブランド化にこだわるのか、その想いを拝聴しました。その志に心を打たれつつ、隠岐牛の焼き肉にも舌鼓を打ちました。



## ◆オリエンテーション

食後、五感塾をスタートするにあたり、海士町の生き残りをかけた挑戦の紹介と海士五感塾での学び方と心構えについて共有しました。また、各自が自分自身の現在の「人間力」を振り返りながら視覚的に見える化するワークを行いました。二人組になって自分の「人間力」について自己開示しながら、今後伸ばしていきたい力について語り合い、場が一気に和みました。質疑の時間には、イオンリテールと海士町の共通点、相違点についての意見や、「岩本さんたちは、この島で骨をうずめるつもりか」「志を持つきっかけは何だったのか」、といった質問が活発に飛び交いました。



## ◆CAS 工場視察

その後、島の生き残りをかけた挑戦の1つ、第三セクター(株)ふるさと海士が運営するCAS(Cells Alive System)という最新冷凍技術を導入した工場を視察しました。説明を受ける中でその独創的な挑戦に、参加者からは感嘆の声も上がりました。

\*CAS 冷凍は細胞組織を壊すことなく凍結し、解凍後もとれたての鮮度のまま食べることができるため、離島のハンディキャップを克服するツールとして注目を集めている技術です。



### ◆潮風ファーム訪問

続いて、お昼に食した隠岐牛の肥育現場を訪問しました。先ほどの奥田さんに案内していただきながら、「どうやったら高い評価を受ける美味しい隠岐牛が育つのか」といった育成の秘訣や、「女性が世話した牛と、男性が世話した牛で、どう変わるか」といった現場でこそ見えるお話を伺いました。牛らしい香りが立ち込める中、参加者は興味深げに、牛と関わっていました。



### ◆シェアリング

そして今回の宿泊施設である、隠岐自然村に到着したのち、小グループで今日感じたことを振り返りました。海士町は危機感や価値観が共有されている、海士町の組織経営は企業にも生かせるのではないのか、といった感想が述べられました。



### ◆夕食交流会

夜の交流会は、海士町の改革をリードしている澤田副町長をはじめとした行政のメンバーや、まちづくりに貢献しているIターン若者、本日お世話になった潮風ファームの方々などと、それぞれの志や職場の課題などを語り合い交流を深めていきました。途中、自己紹介を兼ねて、五感塾参加者は今回の研修にかける想いを、海士町の方々は島の活性化への想いを1人ずつ共有し、場は大いに盛り上がりました。

最後は、佃教育長より、1本締めならぬ「だんだん」締めにて、宴が結ばれました。

\*「だんだん」は「ありがとう」という島根県の方言です。



## 【二日目:～今、ここに生きる命の環～】

### ◆4時半起床

今日は漁に出るため、早朝 4 時半に起床しました。ラジオ体操を行い、自分の身体と五感をしっかり起こして、一日に臨みます。



### ◆大敷網漁船で船出

まだ暗い中、漁船に乗り、海中に張った大きな定置網を船で引き揚げる大敷網を体験しました。体長 1m 近くもありそうな大きな紅イカをはじめ、サバやタイといった様々な収穫がありました。水揚げ後、田仲漁労長の計らいにより、大きなタイやサバ、アジ、白イカをたくさん頂きました。

\*いただいた魚は、この日の夕方に参加者たちの手にかかり調理され、夕食交流会にて田仲さんたちにも召し上がっていただきました。



### ◆漁労長の情熱に触れる

その後、元・小学校跡に場所を移し、田仲漁労長から仕事や人生にかける想いを語っていただきました。先ほど使った大敷網は、既製品ではなく、田仲さん自らが設計され、ご自身で海に潜って状況を確認しては改良を重ねていって完成したものだったそうです。この網は現在特許も出願中とのこと。お話を聞いた後、定置網事業を県下No1に導いた田仲漁労長の仕事への情熱はどこからやってくるのか、田仲さん個人の生き方や価値観に迫る質問が多くされました。途中、田仲さんの心の底から発される熱い言葉に、涙する参加者もいました。



### ◆まめな会参加

昼食は地元の方達の「まめな会」に招待していただきました。「まめな会」は、高齢化が進み人口の約半数が65歳以上となっているこの地区で、「妻に何かあったときに、食事ぐらいは自分でつくれるようにしておこう」と自主的に男性が集まってはじまった料理学習の会のことです。80歳を過ぎても毎日海に出ているような元気な方達と一緒に、食べて、歌って、語り合い、大いに地元の空気を五感で堪能しました。



### ◆農業体験

午後は、農事組合法人サンライズうづかと、海士町有機米研究会の代表をされている向山剛之さんを訪れ、「安心安全のものづくり」への強いこだわりや、そのこだわりに至った背景などを伺いました。

話を聴いた後は、ゴマの選別のお手伝いと夕食交流会用の食材調達をさせていただきました。ゴマを1粒1粒確認しながらゴミを取り除く作業はかなり大変で、安心安全な食材の裏にある生産者の努力を全身で感じることができました。



## ◆料理講習

朝の大敷網や向山さんの畑でいただいた食材をもとに、お世話になった方々への恩返しの気持ちをこめて夕食交流会の料理を自分達でつくりました。地元食材発掘家の濱中美知子さんと、隠岐自然村の村長の深谷治さんから郷土料理を教わりながら、地産地消のいただいた命に感謝し、真剣に料理を楽しみました。



田仲漁労長からいただいたタイのお造り



サバのだしがおいしい手打ちの隠岐そば



向山さんのところで収穫したふろふき大根



濱中さん創作のおいしいアジのシチュー

### ◆おもてなし交流会

本日お世話になった方々をお招きしての交流会。命の恵を受けて日々生きている生産者の皆さんと熱く語り、盛り上がっていくうちに、三味線が登場し、民謡や踊りがはじまりました。鍋ふたやしゃもじといった台所道具を使った庶民的な踊りを楽しみ、最後は海士町名物「キンチャモニャ」を全員で踊り、大きな一体感を味わいました。



## 【三日目:歴史から学ぶ 多様なつながり】

### ◆自然散策

朝は、大自然の仕組みや、この土地の自然と文化のつながりなどを解説していただきながら、雨が降る自然の中を散策しました。



### ◆立つ鳥あとを濁さず

2日間泊めていただいた隠岐自然村を、感謝の気持ちを込めながら入念に掃除しました。前日にお世話になった向山さんがマイクロバスを運転して登場してくださったので、向山さんのユーモア溢れるガイドを聴きながら移動しました。



### ◆隠岐神社参拝

隠岐神社と後鳥羽院資料館では、宮司の村尾さんより、この島へ御配流となった後鳥羽上皇をはじめ、流人の島であった海士の歴史の話を伺いました。全国、海外からもIターンが集まるようになった現在の海士町と比べながら、興味深く聴きました。



### ◆97歳波多総一さんから人生を学ぶ

その後、97歳ながら本の制作や畑仕事などとても元気に活躍されている波多総一さんより、昔の暮らしの智慧や、人生を元気に長生きする秘訣についてお話を伺うことができました。いつになっても「恋」をし続けている波多さんの生き方に、感動しました。



### ◆振り返り共有会

昼食後、海士五感塾全体の振り返りを行いました。生き残りをかけて挑戦し続ける海士町から、何を感じ、何を学べるのか、それぞれの職場に何を持ち帰れるのか、たくさんの想いを共有しながら、それぞれにとっての海士五感塾を深めていきました。

### ◆出発

海士町の人たちが大勢見送りに来られ、たくさんの色とりどりのテープが舞う中での船出となりました。再出発です。感謝。



## ◆参加者の声

・海士町の方と交流できたことで、「おもてなしの心」が何か、気が付きました。今、私たちに不足している心に響くものが海士町にはあふれていて、それは、みなさんの努力と、地元が好きという想いだと思います。わたしもイオンが好きと胸をはって言えるようにイオンをもっともっと知り、良くしていきたいと思えます。

・今回の海士五感塾は島の生き残りをかけた海士町が地方自治体でありながら企業経営にも通ずる戦略で町を活性化させている現場を目の当たりすることができました。その原動力となっているのは海士の方々も持っている「人間力」にあるのではないかと思います。個性溢れる人が多く、家族親戚のように誰とでもコミュニケーションをとれることは現在の日本人にとって必要とされることではないでしょうか。会社もこれと同様に「人間力」の高い人間を育成し、プラスの「場」を作ることによって職場を活性化させていく必要があります。

・今回の塾から学びをいただき、私たちとして捻り出したことは、「現実を見つめる＝危機を認識し受け止める」「商売の原点を見つめる＝生産性を生む」「一人の力は限られている＝職場一丸」という3つです。従業員である私たちが当事者意識を持ち、目標に向かって行動することが大きな成果につながると学びました。組織としては、組合員一丸となって「自分たちの職場は自分たちで守るアクション」としてまとめあげ、職場単位で行動することを決めました。

・五感塾を通して、地域で暮らしている方々の誇り・想いなどを肌を感じる事が出来ました。海士町自体の改革、一つの企業として捉え、改革していく姿は尊敬に値するものでした。わが社では一体どうなのか？考え方が従業員全体には伝わらず、全員のベクトルが合っていない現実をみると途方にくれてしまいそうに感じました。しかし、そうは言っていられない状況です。我々が出来ることから取り組んでいかなければならないと思います。自分の島に誇りを持つ(島のブランド化)≒会社(仕事)に働きがいを持つ。と置き換えることができると思います。また創意工夫というものがあったと思います。我々も過去の事例に囚われて、新しいことへのチャレンジ精神が薄れてきているのでは…。田中漁労長のお言葉「やろうと思えば何でもできる！！」ということが我々にとって必要だと思いました。何事にも「熱意」「誠意」「創意」をもって行動していきたいと思えます。

・とくに感じたことは「季節の恵み」という感覚です。私たちの商売は、海の地域に山のモノを、山の地域に海のモノを届けることでそれぞれの地域に暮すお客さまに暮らしの豊かさを提供することでご支持を頂きながら商売をして来たはずでした。しかし、いつの頃からか提供する品物が季節を飛び越えて売場に並ぶ例も増えています。旬の商材の「旬」の文字が消え、それこそ「時間」を飛び越えて「商材として」各地からモノが集まり売場に並んでいるのです。海士町で大切にしている豊かさとはまるで違う、違和感(何でも手に入る時代)のある豊かさが、私たちの日常にあるということだと感じました。時空を飛び越えた代償に私たちが失って、無くしているものはとてつもなく大きいのです。

・私たちが大切にしなければならないものは島の暮らしにはしっかり根付いているのに、都会や企業には希薄になってしまふ。豊かな暮らしと豊かな心を持ち、人間らしく生きていく。その中で経済行為も善い循環で潤う。今の現実では経済行為の高まりと心の豊かさが「二律背反」にさえ感じてしまいます。自分自身がどうありたいかとともに企業という器がどうあればいいのか考え行動することでしか現実はできないと思います。ここで感じたこと、気づいたことを心に焼き付け、勇気を持って行動し続けたいと思います。

・海士町はまさしく、「海のサムライ」でありお会いしたすべてのみなさまから実直さと、なんとも言えない清々しさを感じました。みなさまから頂いた元気、気づきをできることから行動にしていきます。そして、こうして縁があって出会えたみなさまには、「ありがとう」の感謝の気持ちでいっぱいです。

・おひとりお一人の話から私が感じ取った「勇気」は「自分と関る全ての人への感謝と尊敬を素直に表現し行動に表すこと」だと学びました。(中略)今私たちに足りないもの、それが自分に関する人々への感謝と尊敬の気持ちを素直に行動に移すことではないかと思ひます。私をはじめとする今回海士町で体験した仲間一人ひとりが、それぞれの職場や地域で「ちょっとした勇気」をふるって気持ちを行動に移すことが、家族職場地域を善くしていくことと信じます。

・島の人達だけでは気づかない、島の人達のいいところを引き出す力。今回のプロデューサーの大きな世話人力を感じました。価値観とは組織や共同体に属することによって継承される生き様との事。海士は今、継承されてきた価値観を共有できる島の外から住人によって新しい生き様をもつ共同体として輝きを強くしている途上なのだと感じました。これは、自分の会社を輝かせ成長させていくことにもつながることと感じました。

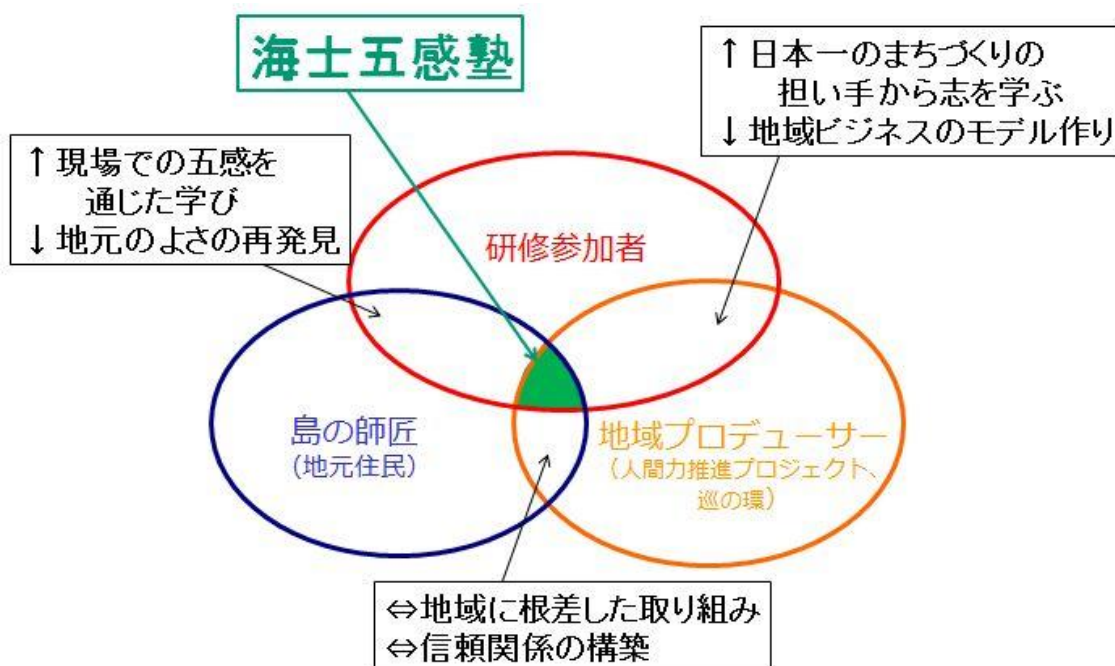
・私が感じたのは“何事もあきらめない”“自分らしく生きたい”“自分も自分以外の人も幸せにしたい”という思いが「勇気」を持つに至る源ではなかったかと感じております。それらは海士町自体が持つ歴史・文化・生活が根底にあるのだとは思ひますが、皆さん自信と誇りを持って日々の生活をされており、老若男女目が輝いておりとても魅力的に映りました。自分も会社・家庭において少しずつでも“これだ”という誇れるものを見つけ、更に広く大きく行動に移せるようにしなければという思いを強くしました。

・本土から離れているため外部との接触も少なく、そこにあつたのは本来の日本人の姿のような気がします。農業の方の話に「頼りにしてくれることが嬉しい」という言葉があり、私も「頼られる社会人」でありたいという働く動機付けができた気がします。

・海士町はまさに「人間力の島」だと思ひました。このたびご縁があつて出会えた師匠の皆さま一人一人から、人生の深い味わい方を伝授していただきました。いつか再び海士町を訪れて、皆さまの人間力に触れて学びたいと思っております。

## ◆海士五感塾の効果

海士五感塾は、参加者・地域プロデューサー・地元住民全員にメリットがあります。



## ◆地域プロデューサーの紹介

【岩本 悠】

1979年、東京生まれ。学生時代、一年間アジア-アフリカを巡り、異郷体験・異文化交流を通して五感で世界を味わう。その際に、「現地でのあらゆる出逢いや体験を通して自ら学ぶ」という「万事研修・自修自得」の考え方に行き着く。また、「学びの場づくりを通して、人の幸せに最大限貢献する」という自分の人生のミッションを見出す。

帰国後、その気づきや学びを共有したいと思い、「留学日記」(文芸社/幻冬舎)を出版。その印税を使って、自分がお世話になってきた途上国に学びの場を恩返ししたいと思い、アフガニスタンに学校をつくる。

卒業後、ソニーの人事部で、人材育成や組織風土改革活動、CSRとして教育を通じた国際貢献プロジェクトなどに携わる一方、自分の立ち上げたボランティア団体にて、海外への教育支援活動や「世界を五感で体感するワークショップ」の全国の学校での実施を進める。

そんなある日、海士の中学校で出前授業を行ったところから、海士町での人づくりをやってもらいたいという話につながり、結果、海士へ移住。現在は人づくりに携わる。

## 【阿部 裕志】

1978年10月21日、愛媛県新居浜市生まれ。自由な校風の愛知県立旭丘高校に通い、「主体性」「自由」「責任」を強く学ぶ。京都大学工学部物理工学科入学、同大学院工学研究科材料工学専攻修士課程修了。在学中の専門分野以外に「自給自足できるようになること」を目標とする。アウトドアサークルと有機農業研究会に所属。大自然の雄大さ、命のありがたみを学ぶ。また、国内海外を自転車やバックパッカーとして旅もする。

世界に誇るモノ作りを学びたくトヨタ自動車に入社。車両溶接工場での生産技術を担当し、レクサス等新車種の立ち上げ業務のコーディネートに携わる。仕事に追われる中で、大量生産・大量消費の現代社会に疑問を抱き、直接人の役に立てる仕事をしたいと思い、入社4年目で退社。

現在、島根県隠岐島にある海士町にて株式会社「巡の環（めぐりのわ）」を友人と3名で立ち上げまちづくり業務に携わる。

## ◆お問合せ先

株式会社 巡の環（めぐりのわ）

担当：阿部 裕志

住所：〒684-0403 島根県隠岐郡海士町大字海士 1508-8

電話番号・FAX：08514-2-1966

E-mail：[abe@megurinowa.jp](mailto:abe@megurinowa.jp)